

---

# 現実主義ファンタジア

又里ゆたり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現実主義ファンタジア

### 【Nコード】

N6879Z

### 【作者名】

叉里ゆたり

### 【あらすじ】

強い瞳を宿した、ある人は言った。

【『想い』がなければ、世界は変わらない。】

綺麗な瞳を宿した、ある人は言った。

【『実力』がなければ、世界は滅ぶ。】

『どちらも必要』なんて都合が良すぎる事はNG。

つまり、『想い』か『実力』…どちらかを選び、もう片方は捨てなければいけない。

さあ……、どちらを選びますか？

## プロローグ・運命の分かれ道。(前書き)

この小説は、プロローグ後の物語が選択肢によって分岐します。  
サブタイトル表記で分けますので、間違いの無いようにご注意くだ  
さい。

キーワードに関係ないものがあるじゃないかとお気づきの方もいる  
かと思いますが、後に関係して来ます( ^ | ^ ; )

## プロローグ - 運命の分かれ道。

20XX年 4月。

僕・佐渡さわたり 里野りの は、第一志望である大学へ入学した。

大学は、田舎である地元から、少し都会へ出た場所にある。

「あ、佐渡君…、寮、離れちゃったね…」

「うん、まあ…性別の違いっていうのもあるからね。」

ここへ進学したのは、僕だけではない。

幼馴染である、相須あいす ななか も、専攻した学科は違うものの、同じ大学に進学。

ななかとは生まれた時から家族ぐるみの付き合いで、18年間ずっと一緒に過ごしてきた。

人見知りの激しい彼女だが、時が経つに連れてななかも徐々に打ち解けていった。

そして、ななかと過ごしていくうちに、物心がついた頃には…

ななかの『オーラ』が見えるようになったのだ。

淡く太陽の様な光を常に纏った彼女。その光は、時を重ねることに  
少しずつ、微かに強くなっていた。

時々彼女の淡い光が、僕の心をゆっくりと、やわらかく元気づけて  
くれる事もあるのだ。

気づかぬうちに僕はそのオーラに惹かれ、自分の進路の事を忘れて  
彼女と同じ大学を志望していた。

「どうしよう…私、友達できるかなあ…」

「大丈夫だよ。ななかは優しいから。」

「えっ…私…誰にも優しくなんてできない………」

ななかのオーラの話は誰にもしていない。勿論、本人にも秘密。

だから、このオーラが自分だけに見えるものなのかどうかもわから  
ない。

「同じ学科の人に声をかけてみなよ。何事も最初が肝心だよ。」

「…うん、私、あの人に声かけてみる。あ、あのう………！」

「お、流石だな………」

僕は言葉を失った。

「…はい？何でしょうか？」

「あ、あのう、福祉学科の方ですよね！！？」

「そうですね…あなたは？」

「私、同じ福祉学科の相須 ななか と申します！！…これからよろしく…お願い、します…」

「ふふっ、元気がある方ですね。私は、杜地原 もりちはら 絢乃 あやのです。よろしければ、アドレス交換しませんか？」

「え……あ、ありがとうございますっ！」

ピピッ、と赤外線通信の携帯の音が短く鳴った。

「明日、良かったら一緒に講義受けに行きませんか？」

「本当にありがとうございます、初日から心強いです！」

「では、また明日会いましょう。」

「はい！明日からよろしく願いします…！」

「佐渡君！…やったよ！ありがとう！！！」

「……………」

「あれ…佐渡君？」

肩から彼女のあたたかさが伝わり、漸く我に返った。

「あ、ごめん、ななか…僕、ぼーっとしてたみたい。」

「うん、ちよつとアドレス交換してたからね…杜地原さん、綺麗な人だったなあ…佐渡君、もしかして見てなかった？」

「いや、見てたよ、ちよつとね……………」

『ちよつと』見ていたというのは真っ赤な嘘。むしろ、ガン見のレベルだ。

「杜地原さんがいるから、これから楽しみ。」

……………それに、佐渡君とも…会えるから。」

僕の耳に、彼女の言葉が入ってこなかった。

女性としての落ち着きがあり、モデルのように手足がすらっとした



杜地原 絢乃。

大抵の男性は一目でノックアウトだろう。

しかし、僕にはそんな外見なんて関係ない。

「佐渡君、これからまたよろしくね。」

「うん、そっだね……」

彼女の太陽のようにあたたかい光。

小さいころからずっと見てきた、徐々に淡く強くなっていく光。

しかし、僕はこの光とはまた違った、眩しく輝く幻想的な光をみた。

杜地原 絢乃の、月のように眩しい『オーラ』を。

## プロローグ - 運命の分かれ道。 (後書き)

初投稿です！慣れないところもあるのですが、ご容赦ください f ^  
^ ;

プロローグという事で楽しく書かせていただきました！

あと1話プロローグが続いた後に、分岐型の物語となっていくので、  
お付き合いいただければ嬉しいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6879z/>

---

現実主義ファンタジア

2011年12月23日00時33分発行